

症例報告：犬の大網原発悪性末梢神経鞘腫瘍の一例

獣医臨床検査学教育研究分野 准教授 杉山晶彦

末梢神経鞘腫瘍とは

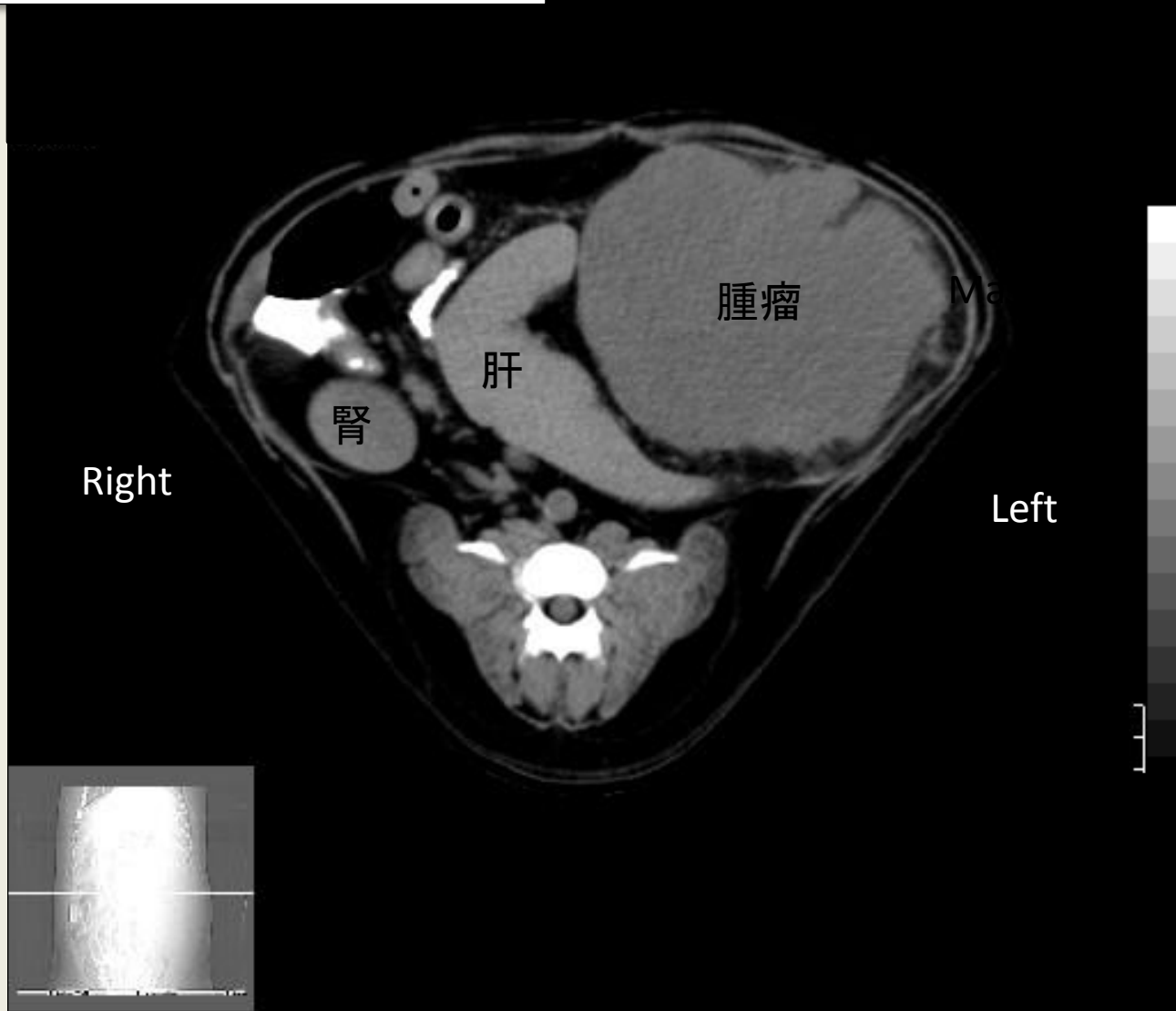
- ・末梢神経支持細胞の腫瘍である神経鞘腫 (シュワン細胞由来)と神経線維腫 (シュワン細胞・神経外膜・内膜細胞由来)の双方を併せた腫瘍
- ・犬では血管周皮腫との鑑別がしばしば困難となる
- ・周囲組織に対し浸潤性増殖を示すため、外科的マージンを確保し難い
- ・良性・悪性腫瘍とも転移は稀であるが、再発しやすい
- ・病理組織学的にAntoni type A領域 (細胞質の豊富な紡錘形腫瘍細胞の束状配列像)およびAntoni type B領域 (星芒状腫瘍細胞の粘液腫様増生像)が認められる

症 例

- ・犬 (ゴールデンレトリバー)、10歳、雄
- ・腹痛、食欲不振を主訴とし、他院を来院し、
腹腔内腫瘍が認められる。
- ・精査・外科的摘出のため、本学動物医療センターに来院した。
- ・血液検査：白血球数上昇 (18900/ μ l)以外著変は認められなかった。

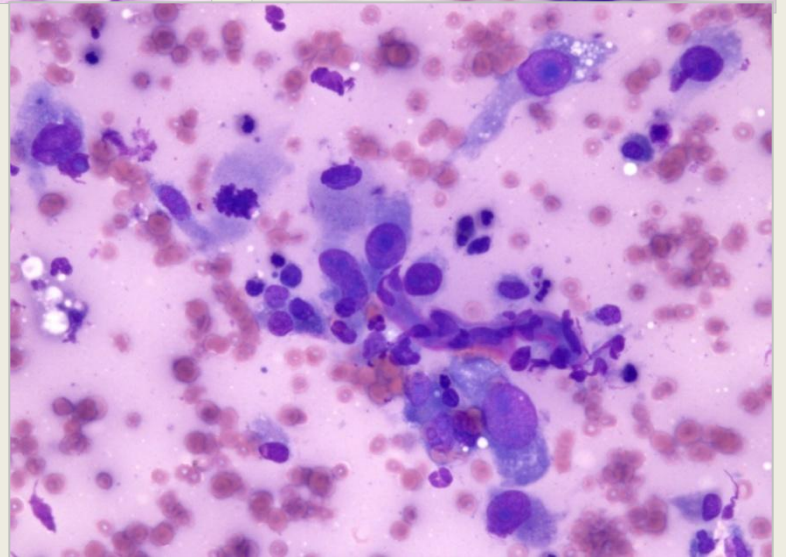
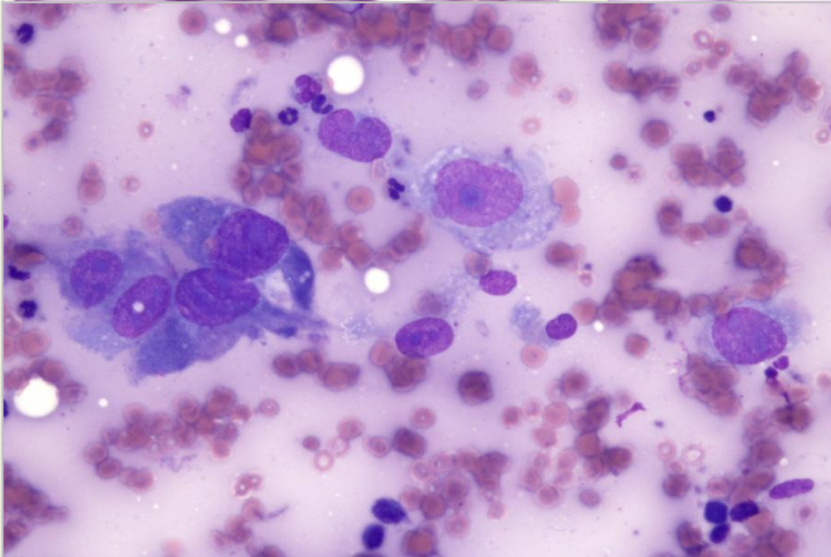
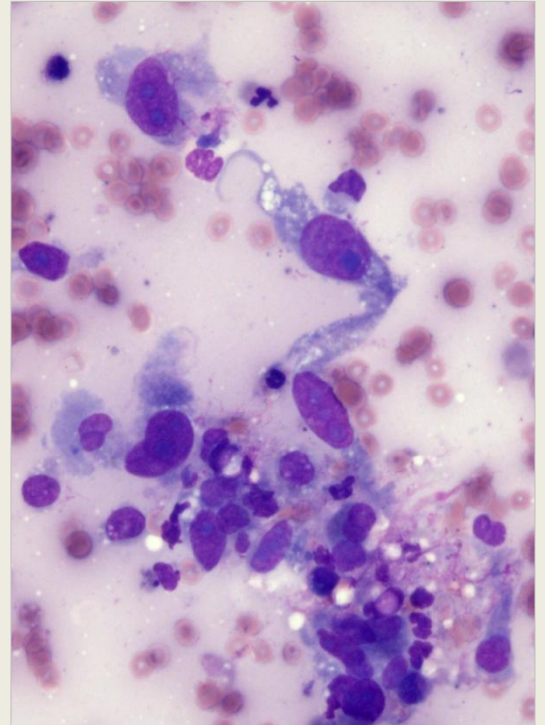
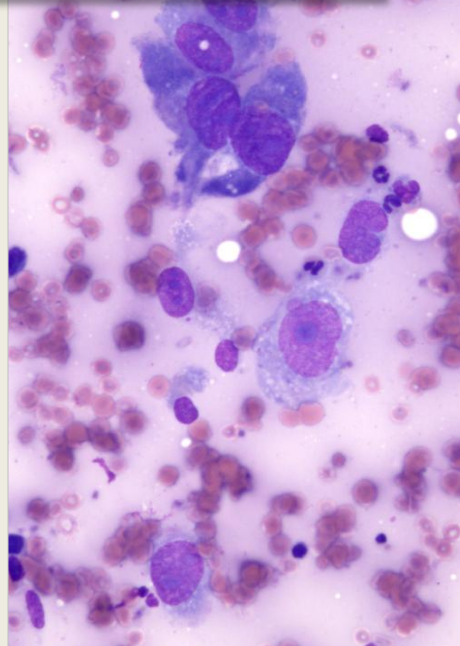
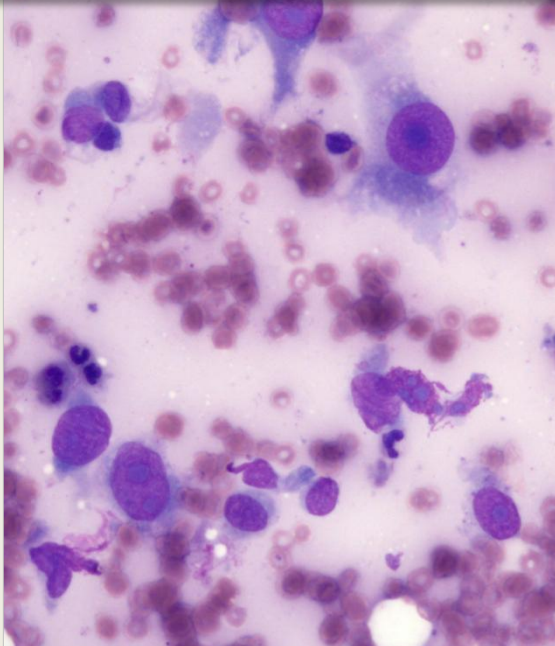
CT検査所見:

左側上腹部に大型腫瘍が認められる。
腫瘍と肝臓・腎臓との連続性は認められない。

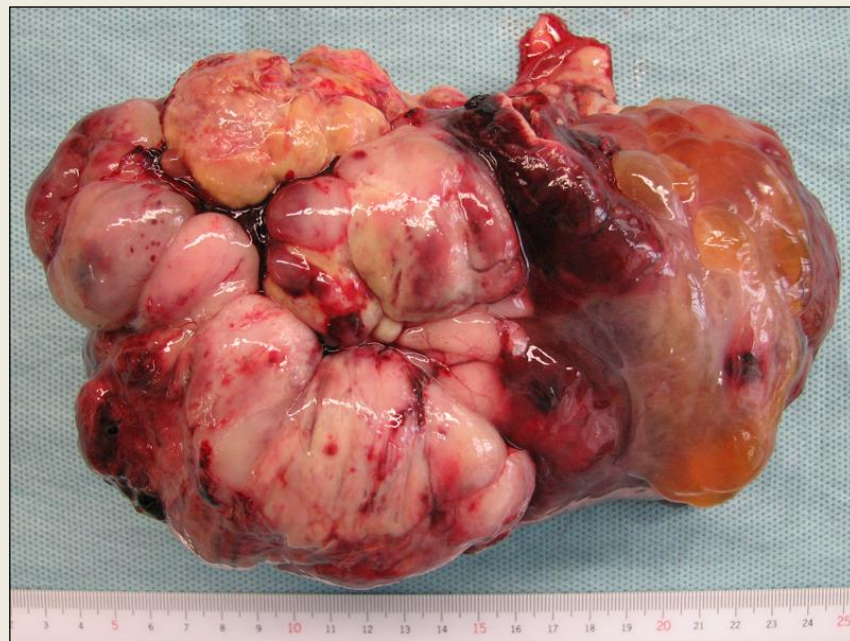
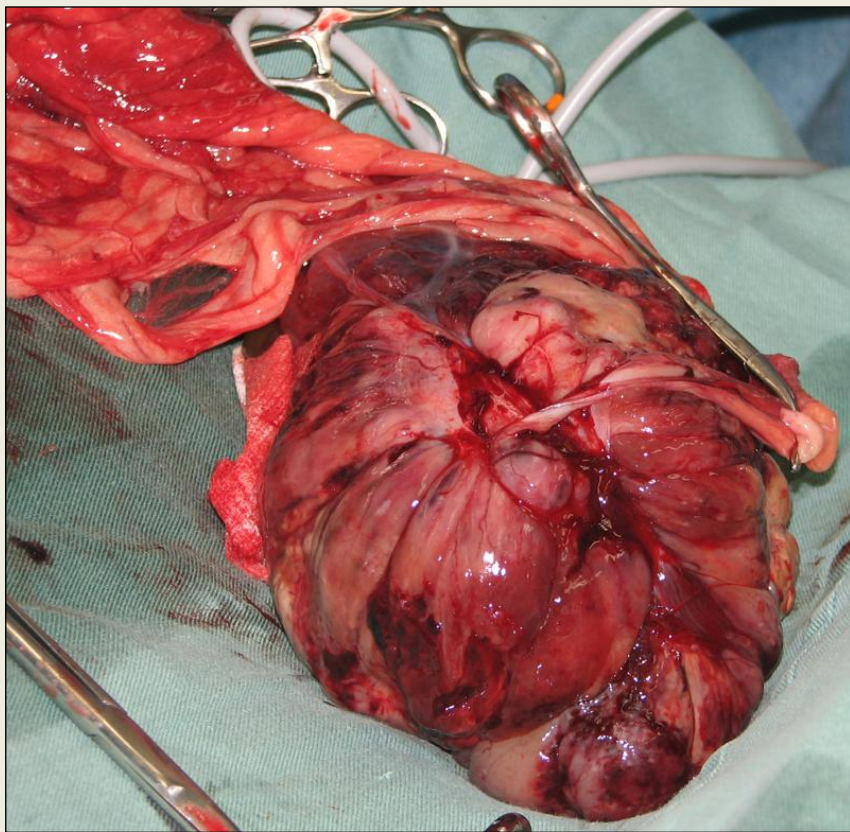


腫瘍細胞の細胞学的所見:

類円形核を有する紡錘形~多角形細胞が散在性に分布していた。
核は大小不同を呈し、大型の核小体が認められた。



腫瘍の肉眼像

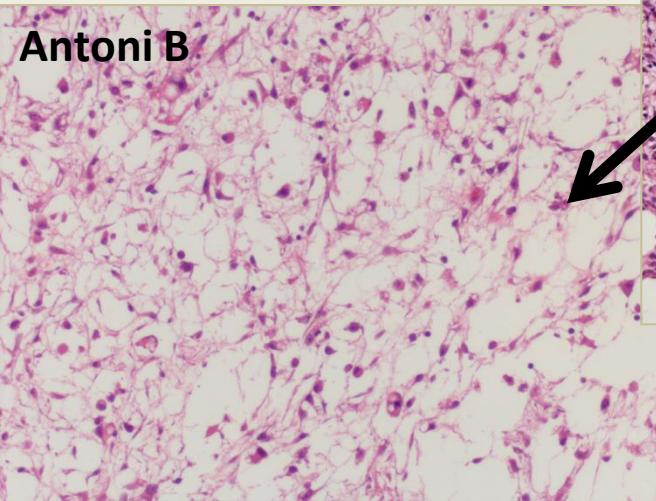
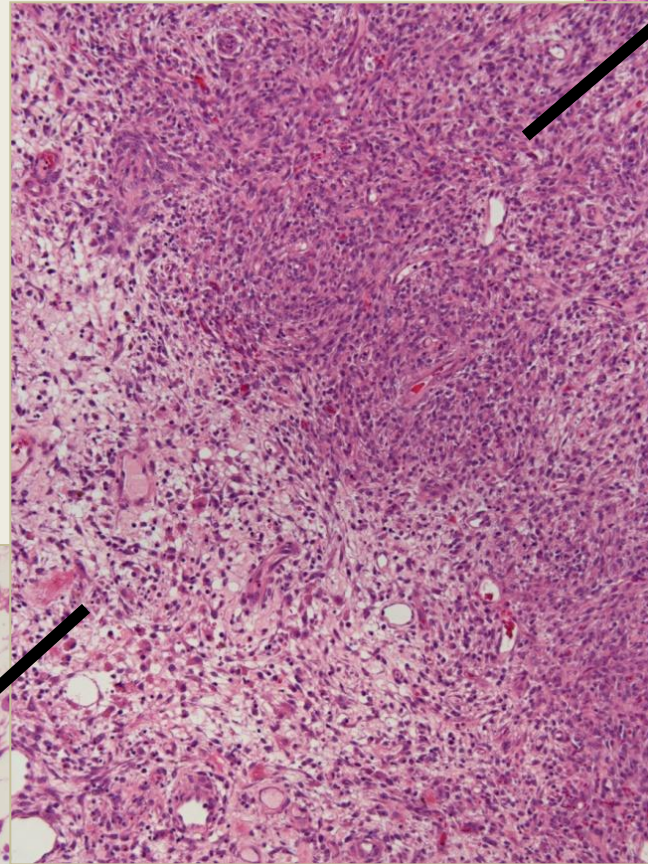
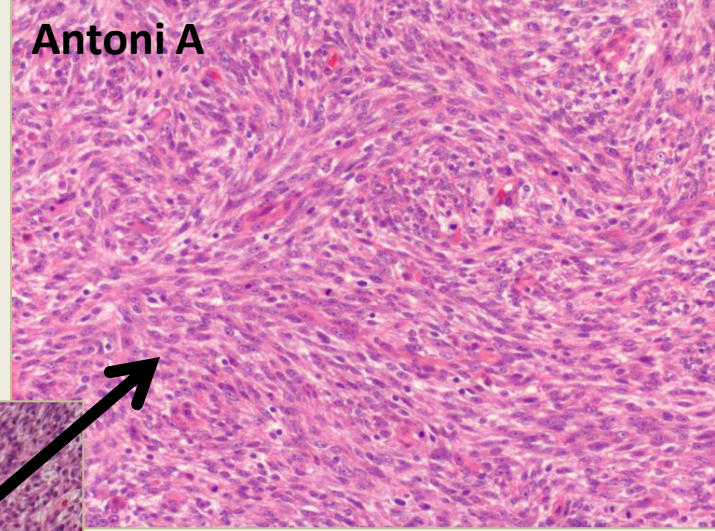


- ・17 x 11 x 8 cm
- ・湿重量 1500 g
- ・大網と連続していたが、他実質性臓器との連続性は認められなかった
- ・病巣の播種性分布は示さなかった

腫瘍の病理組織学的所見:

Antoni type A領域 (細胞質の豊富な紡錘形細胞の束状増殖像)およびAntoni type B領域 (星芒状細胞の粘液腫様増生像)の混在が認められた。

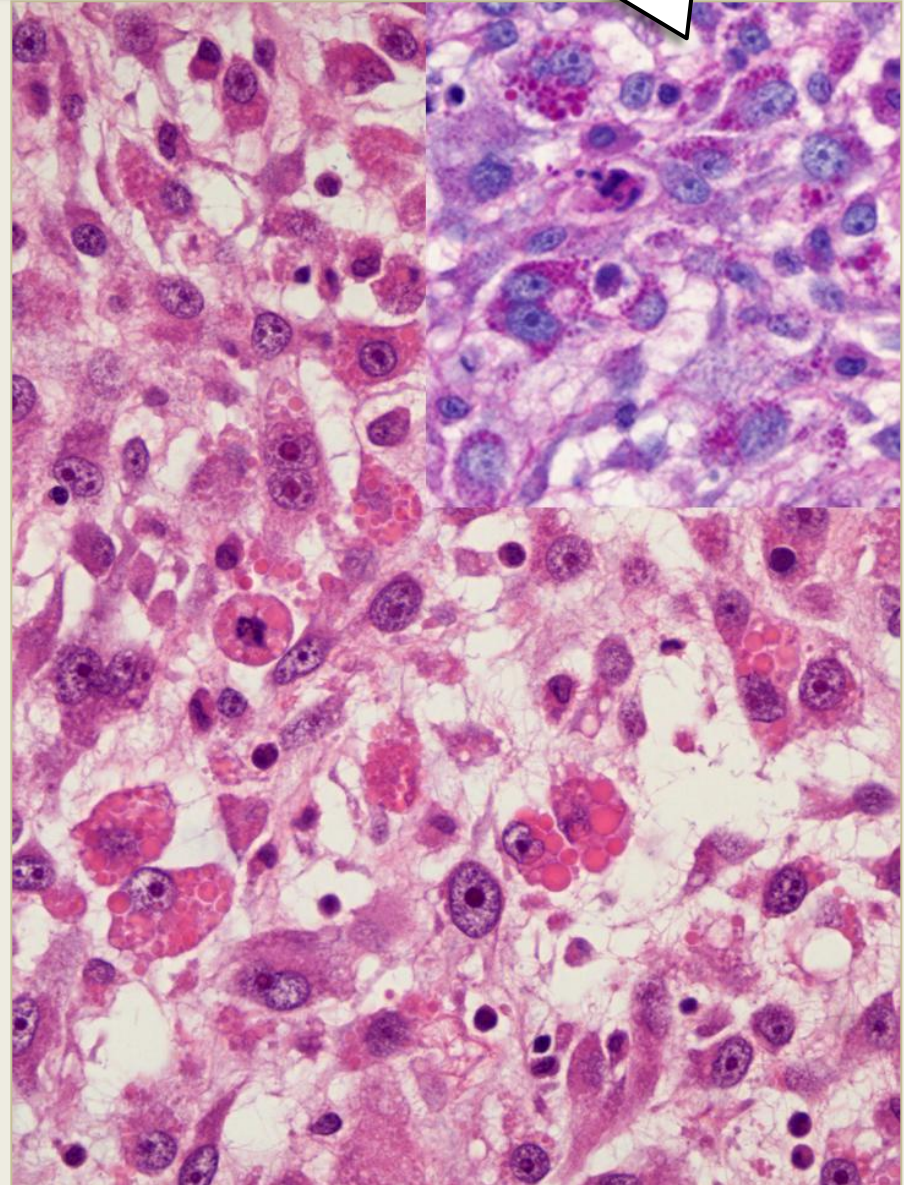
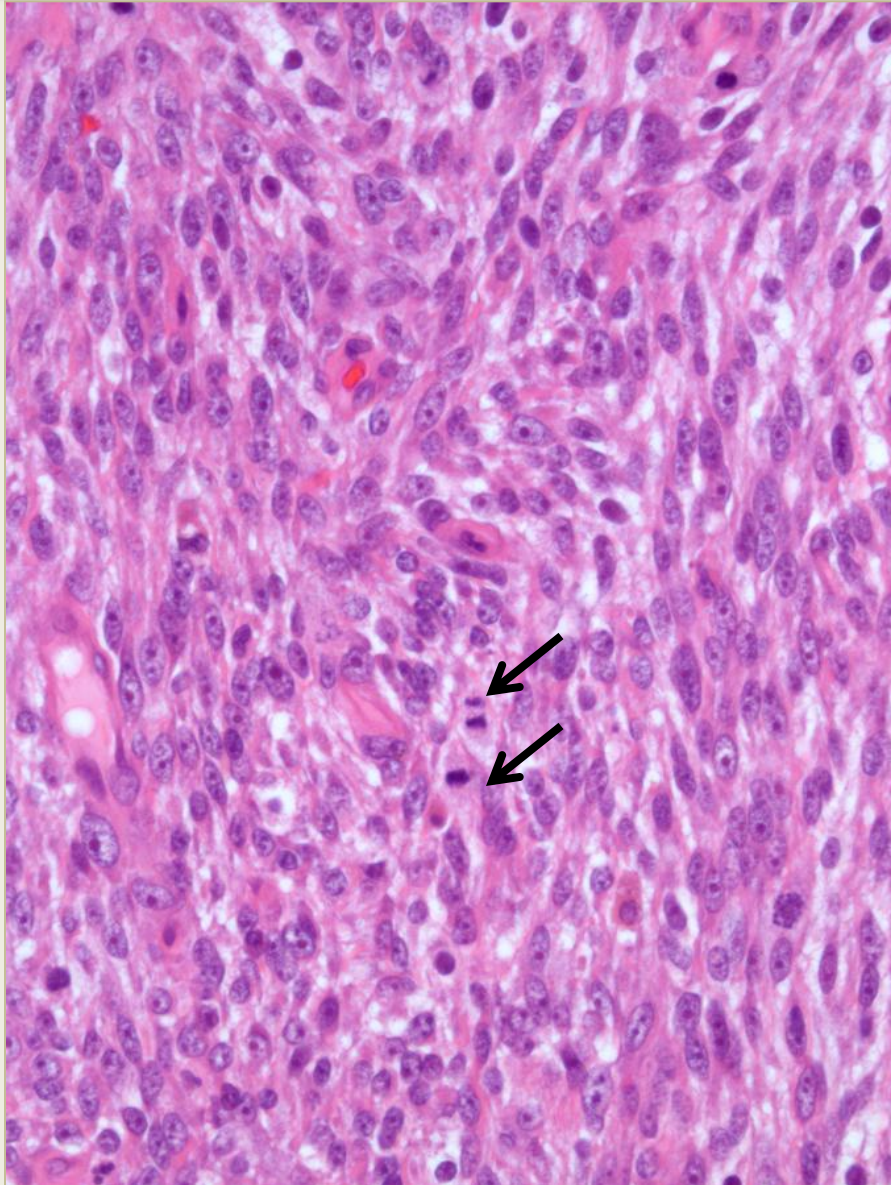
Antoni A



腫瘍の病理組織学的所見:

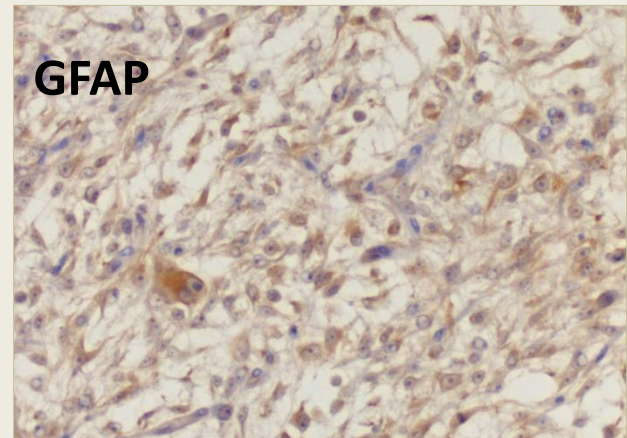
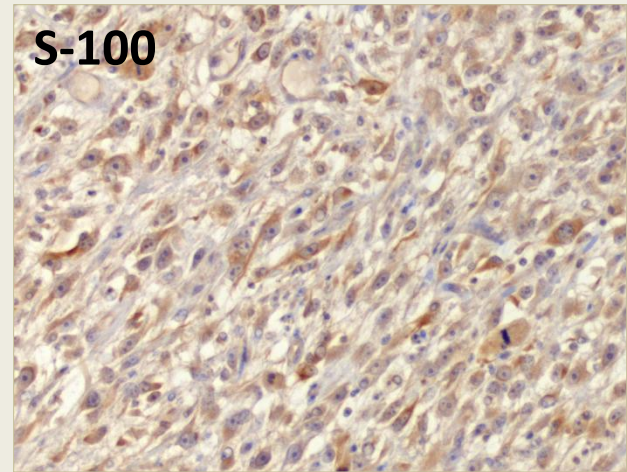
Antoni type A領域では紡錘形腫瘍細胞が多数の核分裂像(矢印)を伴い束状に増殖していた。また、当該腫瘍細胞はしばしば好酸性顆粒を有していた。当該顆粒はPAS染色陽性であった。

PAS染色陽性



免疫組織化學的特徵

- Vimentin 陽性
- S-100 陽性
- GFAP 陽性
- MBP 陽性
- Myoglobin 陽性
- Cytokeratin 陰性
- α -smooth muscle actin 陰性
- Factor VIII-related antigen 陰性
- Lysozyme 陰性
- Myeloid/ histiocyte antigen 陰性



診断:

大網原発悪性末梢神経鞘腫瘍

- ・人における大網原発悪性腫瘍として消化管間質腫瘍 (GIST)、脂肪肉腫、血管周皮腫、悪性線維性組織球腫が報告されている。当該腫瘍は、巨大化することが多く、医療としては外科的切除が第一選択される。予後・再発率は腫瘍により異なり、脂肪肉腫の再発率は極めて高く、予後不良であること (Hepatogastroenterology, 46, 2110-2112, 1999: Review)、GISTの予後は比較的良好 (World J Surgical Oncol, 66, 2007: Review)が知られている。
- ・犬における大網原発腫瘍の発生は稀であり、2症例の報告のみが存在する。
 - ・脂肪腫 (Indian Vet J, 81, 1392-1393, 2004)
 - ・脂肪肉腫 (Vet Pathol, 23, 84-87, 1986)